

研究種目：基盤研究(A)

研究期間：2006～2009

課題番号：18202021

研究課題名(和文) 近代日本の戦没者慰霊に関する総合的研究

研究課題名(英文) The general study about the memorial services for the war victims in Modern Japan

研究代表者

檜山 幸夫(HIYAMA YUKIO)

中京大学・法学部・教授

研究者番号：40148242

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・日本史

キーワード：戦没者慰霊・戦没者墓・戦争記念碑

1. 研究計画の概要

近代日本の戦没者慰霊について、戦争記念碑と戦没者墓地・墓碑を考察対象として、それらの悉皆調査と関係者への聞き取り及び文書資料・文献資料などの収集を通じてその実態を把握し、それを基に関連する分野を総合して科学的な分析を行うことによって、日本における戦没者慰霊の特徴を解明することを目的としている。このため、日本という国家と社会を全体的視点から把握し、さらに日本の特徴を東アジア近隣諸国やヨーロッパキリスト教世界及びイスラム世界の比較、さらに第二次世界大戦で同じ敗戦国となり国際的に常に比較対象となっているドイツにおける戦没者慰霊との比較を行うとともに、逆に戦勝国となったイギリス・フランス・イタリアやさまざまな立場に立たされて戦中戦後の時代を築いていったトルコ・ギリシャ・キプロス・マルタ・ノルウェー・デンマーク・スペイン・ポルトガルを中心に比較するなかで、「日本の特徴」(相違と共通)を見ることによって国際的位置を明らかにして行くことに努めている。

かかる研究目的と基本方針から、調査研究の対象を、(1)戦没者慰霊を象徴する造形物、(2)戦没者慰霊にかかわる関係史資料、(3)戦没者慰霊を担っている組織に絞る、これについてその実態の把握を行った。(1)については、主に①軍人墓地における戦争記念碑・慰霊碑・忠魂碑等や墓碑石と関係物、②戦没者墓地における祈念碑・慰霊碑・忠魂碑や墓碑石、③一般人墓地における戦没

者墓碑石等、④戦争記念碑(戦役記念碑や戦勝記念碑)、⑤戦争記念物、⑥戦争関係構築物と関係物、⑦一般構築物における戦没者慰霊物(銘碑板を含む)を具体的に調査した。

調査の方法では、網羅的全部調査と悉皆調査を原則とし、収集データは筆写(形状・文字・造形)、簡易測量(構築物と用地・敷地などを含む)、電子化写真、電子化ビデオ、音声録画又は録音として採集するが、軍人墓地や戦没者墓地などにおいて数千以上の同型物(形状・規模・文字情報の項目)については抽出法により筆写と測量と、写真及びビデオ撮影による画像記録採集とを併用して行った。ここで、電子化写真やビデオ、音声録画などにより資料を収集するのは、安価であることと活用が容易であることにあるが、さらに収集資料データを一般公開する際には予め電子情報化資料としておく方が便利であると考えているからにはほかならない。

(2)の関係史資料については、電子化写真撮影記録・電子式複写記録により収集し、文献資料については購入などにより収集した。電子化資料とするのは、前項の目的にもよっている。

(3)戦没者慰霊を担っている組織、つまり墓地の建設・管理や墓碑石の建立、さらに慰霊祭などの執行を含めてそれらを管轄している組織・機関・団体については、自治体の機関や関係機関・団体、管轄したり管理している機関や団体において関係者を含めて聞き取り調査を行ったり関係史資

料の収集を行う。特に、ドイツ人戦死者墓地についてはドイツ戦死者墓地慰霊協会の全面的な協力を得て行っている。

調査地としては、国内では社会的・文化的・宗教的側面と現代性・地域性、さらに都市部と農村部に島嶼とを基準に全国的視点から、国際的には東アジア近隣諸国での仏教的世界と非宗教的世界・ヨーロッパキリスト教世界・アラブイスラム教世界から抽出して行った。

2. 研究の進捗状況

国内では福島県から沖縄県までを、海外ではヴェトナムと欧州・中東・北アフリカ諸国において実地調査を行った。主な研究成果として、下記の5点を挙げておく。

(1)日本社会では、都市化による共同体の崩壊と人口の流動化が緩やかな地域では、戦死者の尊厳が守られ地域の伝統と文化と共同体的結合により、伝統的戦死者慰霊のかたち(宗教宗派の共存と価値観の独自性)が、戦後においても残されていること。

(2)戦争記念碑は近代国家の象徴的構築物であることから、国家などによって建立されたものが調査した殆どの国に認められた。また、戦争に対する国民の記憶を残し共有化し教訓化するための施設も、多くの国で見ることが出来る。その意味では、明治以来国家が戦争記念碑建立や戦死者墓地(軍の墓地ではない)にかかわってこなかった日本が例外的であった。

(3)戦死者の慰霊について、多くの国では郷土と国家の英霊として位置づけられているため、戦死者慰霊は国家の論理による国民統合の原則が貫かれている。従って、死者への慰霊に国家が主となり宗教へのこだわりは従となり、死者の信仰が尊重される。日本でも、地方では各国と同じで、日本人社会という視点からみると国際的共通性を持っていた。

(4)戦争と信仰では、兵士と郷土社会との関係から殆どの地方や諸外国において、地域の伝統と文化が基礎になっていた。従って、従軍凱旋者も戦死者も郷土の宗教施設に祀られる事例が圧倒的に多い。

(5)慰霊の形式や方法と造形物における伝統性と社会性・国際性との関係は、世俗性との関係が明らかになった。特に表象では、経済の発展と密接にかかわり、且つ物流の密度と情報の交換頻度の高さによる異文化・異民族との接触が深化によって、相互に影響し合っただけでなく国民的同一性と国際的類似性とも強められるという傾向が顕著になっている。そこでは、キリスト教やイスラム教といった宗教的個性すら弱められていた。

3. 現在までの達成度

現在までの進捗状況は、①の当初の計画

以上に進展している。理由としては、(1)研究を計画した段階で立てた仮説が概ね正しかったことから、研究方針に抜本的な変更を加える必要がなく、従って計画通りに順調に行ったこと、(2)実地調査に際しては、自治体をはじめ関係機関や団体などの理解と協力が得られことから、研究を順調に進展させることができたこと、(3)海外における調査研究に際しては、当該領域の専門的研究者が積極的に協力してくれたことと新たに研究協力者として参画してくれたこと、(4)ドイツの戦没者慰霊に関しては墓地や慰霊並びに平和教育などを管轄しているドイツ戦死者墓地慰霊協会が、各国百数十カ所にのぼるドイツ戦没者墓地に関する資料情報を提供してくれたことやドイツ国内での戦没者慰霊に関する情報の提供や関係機関や団体への協力要請・紹介を積極的に行ってくれたことなどによる。このため、現在までのところ想定していた以上の成果を挙げることができた。

このような状況から、今までの成果を纏めた中間報告書として『世界の戦争記録と戦没者慰霊』を纏め、研究成果の提供と新たな問題点の整理とを行った。

4. 今後の研究の推進方策

研究の進展と発展とによって、新たに大きな研究課題が生まれてきた。さらに、ドイツやフランスをはじめとする諸外国の研究者や関係者・関係機関・団体から、本研究への協力の諒解を得たことから、より国際的視点と規模での研究を可能とできている。このため、本研究目的の達成を基本的な成果として、さらなる国際的スケールでの研究体制の構築を想定しながら研究の完成を目指していく。

5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

① 檜山幸夫、「世界的視点からみた戦争記念碑と戦没者慰霊のかたち」、近代日本の戦没者慰霊に関する総合的研究(A) 報告書 I 世界の戦争記録と戦没者慰霊、査読無、報告書 1、2009年、11頁～61頁

② 檜山幸夫、「日本近代史資料としての戦争記念碑—史魂碑の史料論的考察—」、史潮、査読有、新 63号、2008年、4頁～22頁

[図書] (計 1 件)

① 檜山幸夫、「世界の戦争記録と戦没者慰霊(科学研究助成報告書 I)」、近代日本の戦没者慰霊に関する総合的研究(A)、2009年、214頁